

ICCC-10 シンポジウム後記—数多くのインパクトを残して

ICCC-10 プログラム委員会

ICCC-10 では、2つの特別シンポジウム(SS-1~2)と 12 の一般シンポジウム(S-1~12)が開かれた。特別シンポジウムは大ホールを使って、初日に微生物ゲノム科学、最終日に生物資源センターの 21 世紀の展望を考えるというテーマが選ばれ、その間に微生物を中心とした生物資源に関して基礎的な研究、産業と深い関係がある応用研究、知財権や国際連携のような社会的な波及効果の大きな課題など、多岐にわたる 12 のシンポジウムが 2 題ずつ並行して開催された。これらに先駆け、夜のレセプションに続く開会式の前に、オープンセミナー「伝統ある麴の新しい世界」が開催された。これは JSCC が主催し、ICCC-10 の広報のための市民講座としての要素もあり、同時通訳も行われた。「麴菌」をテーマに選び、日本が広く世界に誇れる「伝統的微生物資源」を最新の科学の目で海外からの参加者に知ってもらおうという目的も達せられたと思う。日本には多くの微生物関連学会がある。いくつかの学会にはシンポジウムを共催して支援していただいた。また、それぞれのシンポジウムでは日本人のコンビーナーが国内外のシンポジストの選定・交渉、滞在日程の調整、参加登録など連絡から、会場での世話まで、多大な負担を負って下さった。プログラム委員会として改めてお礼を申し上げたい。500 名近い参加者が、専門とする分野のシンポジウムに参加しただけでなく、この会議で新たなテーマに関心を持ち、初めて出会った外国の研究者と友人になる機会があったとしたら、これも学会を準備してきた実行委員会として大きな喜びである。これらのシンポジウムのプロシーディングスは、ポスター発表の要旨集と合わせて 671 ページの立派な書籍として当日配布された。この完成は、学会直前の多忙な時期に執筆して下さったシンポジストと編集されたコンビーナーのご協力、そして、笠井文絵さんをはじめとする国立環境研のスタッフの方々の努力のたまものである。プロシーディングスは JSCC 会員には割引価格で頒布しているので、是非お求めいただきたい。

14 のセッションのコンビーナーの方々 (S-8 は、同セッションで講演した志村純子博士) に、それぞれのシンポジウムの概要と感想を寄稿していただいた。並行して進行したもう一方のシンポジウムを知る参考としていただくことに加え、残念ながら ICCC-10 には参加できなかった方々に、ICCC-10 のシンポジウムでは活発な議論がなされ、有意義な情報交換の場であったことを知っていただく一助となれば幸いである。2007 年にドイツのゴスラーで開催予定の次回 ICCC-11 での再会を楽しみに、ICCC-10 シンポジウムの総括とする。

シンポジウムセッション

SS-1 「ゲノミクスが微生物学に与えたインパクト」のまとめ	S-5 極限環境微生物とその利用
SS-2 生物資源センターの新しいパラダイム	S-6 地球環境と人類安寧における藻類
S-1 「微生物の種の概念の問題における最近の進歩：定義、方法、そして実際」シンポジウム所感	S-7 「農業微生物の遺伝的及び機能的多様性」報告
S-2 バイオテクノロジーの健全な発展に向けてあるべき知的財産権—現在と将来の組織、法的、経済的側面—	S-8 WFCC とバイオリソースセンター・国際イニシアティブ
S-3 「未知微生物の探索」セッション後記	S-9 ヒトの健康と家畜生産のためのプロバイオティクス
S-4 菌類の生物多様性：生態学、産業、および法律的側面から	S-10 生物資源センターとネットワーク：地域における役割
	S-11 バイオセキュリティと微生物保存機関の役割
	S-12 ヒト及び動物細胞